

---

# キミ想イ。

櫻井 遼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミ想イ。

### 【ZPDF】

Z7306

### 【作者名】

櫻井 遼

### 【あらすじ】

大好きだった彼 優哉を、  
トラックの事故で亡くした美希。

塞ぎ込む美希をからかうように流れる、噂。

真面目でやさしいけれど、内気だった美希は、  
優哉の死によつて変わつてゆき・・・?

## プロローグ。

1か月前。

「キキイ

！」

「ボンッ

甲高いブレーキの音。

何かにぶつかられたような鈍い音。

それは、あまりに突然の出来事だった。  
目の前で起きたことが信じられなかつた。  
受け入れられなかつた。

登校中の悲惨な事故。

原因はトラックの信号無視。

たつた今、となりで自転車をこいでいた君が、  
目の前に倒れていて・・・

どこかで、

「事故だ！！」

という声がする。

「救急車を呼べ！！」

といつ声がする。

そのなかで私は  
呆然と立ち尽くすばかりだった

。

## 回想

二人で原っぱに座っている。

ピクニックに来たんだ。

ランチは私の手作りサンドイッチ。

優哉は、おいしそうに食べてくれる。

あれ？？

おかしいな・・・

優哉がだんだん薄くなっていく・・・

「ハツ！-！」

ガバッと起き上がって時計を見ると

午前7時。

学校には間に合いそうだ。

急いで支度をして、家を出る。

私は埜原美希。  
のじらみき

17歳、高2、テニス部所属。

彼氏は・・・

夢の中でなら会える。

わかりやすく言えば、

この世の人ではなくなってしまった。

1か月前・・・

交通事故で。

あっけない死だった。

そして何もできず呆然と立ち尽くす自分が

情けなかつた。

優哉がいなくなつてから、

学校はつまらないものになつた。

もちろん、友達だつているし、

1人じゃない。

だけど、優哉が私の中でどれだけ大きな存在だったか、  
思い知らされた。

たったの2年間しか一緒にいなかつた、

たつた1人の存在・・・

それでも、私の一部だった。

中学3年の時告白されて、

付き合い始めた。

付き合つたことはこれまでに何回かあったけど、

どれもすぐに終わつてしまつた。

だから、今回も終わるだろ?・・・

そう思つていたのに・・・

優哉はとても優しくて・・・

私のこと考えてくれて・・・

いつでも笑顔で・・・

きっと、これまでに私が出会つた人の中で、最高だつたよ。

優哉のことを思い出すと、

思い出が止まらない。

いろいろあった2年間だったから、

きつと一生で一番大事な宝物。

あの日、優哉にあったから、

乐しくて、

面白くて、

ドキドキして、

せつなくて、

悲しくて、

苦しくて、

でも最高の恋を経験できた。

優哉が優しすぎて、

その優しさが見えなくて、

別れそうになつたこともあった。

他の人に惹かれそうになつたこともあつた。

ほんとうにたくさんの思い出を残して、

私のことも残して、

この世を去つてしまつた優哉。

わたしは今も、

これからもずっと、

空にいる君を想い続けます・・・。

## 出会い

2年前の6月。

中学3年だったあたしは、気晴らしに、  
プールに行つた。

「一人でいるほうが落ち着く・・・」

そう思いながら、プールに足をつけてみる。

ひやつ！冷たい・・・

寒さの残る6月。

プールにはつた真新しい水は、まだちょっぴり冷たかった。

そのとき。

プールに1つの影を見つめた。

影のあるほうへ行つてみる。

・・・？

そこには、とてもかっこいい男子が1人、寝ていた。

それが、優哉だった。

寝顔に見とれていた私は、ふと、思いついて、

優哉の顔をシンシンシンしてみた。

すると・・・

優哉は、起き上った。

「あの・・・今年初めて同じクラスになつたよね？？」

「あ・・・えーっと・・・あ、埜原！－！埜原美希だよね？」

「わあ！覚えててくれたんだ！朝倉裕也、だよね？」

「うん。」

これが優哉と初めてしゃべったとき。

あの日、あの場所で、優哉と私はいろいろなことをしゃべった。

優哉はサッカー部のことや、クラスのこと。

私はテニス部のことや、女子の愚痴。

私は優哉の話を一言ももうすず聞いていたし、

優哉も私の話を真剣に聞いてくれて、ときどきアドバイスもしてくれた。

そんな優哉と、初めてしゃべったあの日、

きっと私は惹かれたんだと思つ。

しばらくして

優哉に告白された かわいいオルゴールと一緒に。

私はすぐうれしくて・・・

すぐOKして、私たちは付き合いだした。

ふたりでご飯食べたり、

遊園地行つたり、映画観たり・・・

私は、この幸せがずっと続くと思っていた。

別れ

「俺達、別れよ。」

そう言われたのは、付き合って3か月、

8月の暑い日のことだった。

お前、津川の」と好きなんじゃないのか?」

「俺は、お前のことがより紗江のこと好きになつたんだ」

え・・・なにそれ

「そんなの・・・ひどいよ。」

「運命だ、仕方ないだろ」

「待つてよ・・・待つて！！」

びひこひなうなつかいのへへ。

たしかに津川はいいやつだよ・・・

だけど、美希が本当に好きなのは、

大好きなのは、

優哉だけだよ・・・

いくり心の中で叫んでも、優哉は戻ってきてくれない。

わかつてたけど、声は出なかつた。

あたしだけが一方的に好きだったの??

優哉は、美希だけじゃなくて、

紗江のことも見ていたの??

やつ思ひと、とても悲しくなつた。

それから、教室で目があつても、

朝会つても、

しゃべらなくなつた。

優哉は、あたしに笑いかけてくれなくなつた。

美希は優哉としゃべりたいよ・・・

前みたいに戻りたいよ・・・

いくら願つても、

優哉は笑いかけてくれない。

話しかけてくれない。

「あいつ、優哉を振つて直人と付き合つてゐるんだろう?」

「つむ、最悪——」

「あの優哉を振るなんていい度胸だよね」

廊下を歩くとみんなの視線が痛い。

何、それ??

直人となんか、付き合つてないよ。

あたしが好きなのは、優哉だけだもん···

なんでそんなうわさが流れているのか全く分からぬ。

気がつけば、紗江がこっちをみて笑っていた。

···見下したような笑い。

所詮あんたなんてこれくらいのもんよ

紗江の不気味な笑みがそう語つてゐる気がした。

ねえ、紗江?

「びひこてそんな笑みを浮かべるの？？」

紗江は何をしたの？？

私から優哉をとらないでよ。

優哉が冷たくなつたと思つたら紗江まで

あたしは優哉と話すこととした。

納得がいかない。

「びひこてことなことになつてしまつたのか・・・

優哉のこことひまですかずかと歩こてこべ。

「ねえつ優哉・・・」

「おつ、優哉の元カノ登場じゃん・・・」

「うわーーーんだよ、お前うーなんだよ美希、話つて  
「うよつと来てくれない？」

やうこつてあたしは優哉の先に立つて、びひこて歩こてこべ。

「びひこて行く氣だよ」

「・・・

中庭の桜の木の所まで来て、あたしは足をとめた。

「ねえ、優哉。

どうして、あたしと別れたの？」

「・・・

「あたし、優哉と別れてから変な噂ばつか流されて、  
すごくつらいんだよ。

あたしが好きなのは優哉だけなのに・・・  
直人のことなんか好きじゃないのにーー」

「・・・

「優哉だって、ほんとうに紗江のこと好きなの??  
紗江、あたしのこと見下すみたいに笑つて見てきた・・・  
何か、裏があるんじゃないの??」

「・・・ごめんな、美希。

おれ・・・ほんとは・・・

紗江・・の「」と・・・

・・・つ好きじゃない!

「なら・・・どうして

「紗江に言われたんだ。

『美希と付き合うのやめれば??

あの仔、優哉のこと好きじゃないみたいよ。

直人と付き合つて噂だし。

「股されてるのなんて、ヤでしょ？？」つて

「どうして……そんな」と・・・

「おれ、どうかしてた。

美希のこと信じるべきだつたのに・・・  
ほんとにめんな、美希・・・」

「・・・ううん、いいよ・・・優哉は悪くないもんね。」

「・・・な

おれたちまた付き合つるかなあ・・・？？

「・・・ううん・・・

「じゅあじゅあじゅあじゅあじゅあじゅあ

・・・あの時

優哉に事情を聴きに行く勇気なんてなければ

こんなひりい思いはしなかったのに・・・

再び付き合つてなつたあたしたちは

前以上に仲良くなつて・・・

喧嘩もして・・・

デートもたくさんして・・・

学校でも知られる仲良しカップルになつた。

噂もいつの間にかなくなつて・・・

あたしは幸せの絶頂期だったのかかもしれない。

未来はだれにも予測できないのだから・・・

この先何があるのか分からぬのだから・・・

## 現実

「美希は、真面目で、やさしい奴だな。」

微笑みながら優哉が言ってくれた言葉。

今でも、あの言葉を思い出すと、涙が頬を打つ。

優哉だつて・・・やせこじちゃん。

あたし、あのとを思つたよ。

優哉は・・・優哉つて名前だから、やせこじちゃんに育つたんだな、つ  
て・・・

今あたしを優哉が見たら、なんて言ひのだろう。

あの頃は、まつすぐの黒髪。スカートの丈だつて、校則通りひざ下。

今は・・・

高校に入って、あたしは変わつたと思つ。

「つよ、優哉を亡へしてから・・・

あたしは変わつてしまつた。

茶髪にパーマ、スカートは腿のギリギリのところまで。

テストの成績も、通知表もガタ落ち。

ここまで変わってしまったあたしを、

もし優哉が見たら・・・

なんて言つんだろう???

優哉は空の上で

どう思つてゐる?

変わつてしまつたあたしのこと・・・

どう思つてゐる?

キーーンゴーーンカーネンゴーーン

授業終了のチャイムが鳴る。

あたしは、瑠花と一緒に購買へ行く。

田常茶飯事。

ふと・・・

ある人だからに目がとまつた。

「ねえ、瑠花！ちょっとあそこ行ってみよ。」

「えつ、ちょっと美希・・・」

有無を言わない瑠花を無理やり引っ張つて、

そこへ行ってみた。

そこは・・・

「誰、あれ？？」

知らない男子。でもすぐかっこいい。

「美希、知らないの！？  
ちよー有名じやん！！

「ひらの一個上の学年の、柏木拓也先輩。」

「へえ～～あたしそーゆーの、興味ないからさ。」

言いながら、柏木先輩とやらを観察。

へえ・・・ちょっと優哉に似てるんだ。

優しそうな眼とか、通つた鼻筋とか・・・

あつ、いま目が合つた！

ドキンッ

胸が高鳴つた。

(えつ・・・?)

一瞬自分を疑つたけど・・・

これは優哉とあつたあの口の胸の音。

あたしは優哉を失つて、一度と恋はしないと誓つた。

もし同じ田に遭つても、自分がつらいだけだから・・・

でもあたしは、この瞬間から、

先輩を好きになつてしまつた。

そして不運なことに(両想いじゃなれば諦め切れたの)に

先輩に、数日後に告白されてしまつた。

帰ろうと思つたら下駄箱に一枚の紙切れが入つてた。

放課後、中庭の木の下で待つています。

差出人不明だつたから不安だつたけれど、

行ってみる」とした。

「埜原美希ちゃん?」

そこへいたのは、一の間の

柏木先輩。

「先輩……どうしたんですか?」

何食わぬ顔で聞いてみる。

「俺な……ずっと美希ちゃんのこと好きやったん。付き合つてくれへん?」

え……

「何で……」

「彼氏……優哉くんやったか??  
事故死してもうたやる。  
ずっと、美希ちゃんのこと心配で  
好きつて言えへんかった。  
優哉くんの変わりでもええから……  
俺と付き合つてくれへん??」

・・・

それが、先輩との始まり。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n73061/>

---

キミ想イ。

2010年10月21日04時31分発行